

## 図書館の徹底活用術⑬

## 生活の中の経験を通じた学びへの着眼

John Deweyの『学校と社会 (The School and Society)』になぞらえて

枝元 益祐

皆さんの学習支援の為に図書館の有用な活用方策についての近接領域を毎回紹介をしています。皆さんの学習活動を拡張する拠点である図書館を有効に活用する為の窓口に於けるレファレンスサービスでの「対話」という実践活動や経験を通じた学びに焦点を当てつつ今回は、ペスタロッチ (Johann Heinrich Pestalozzi) の『白鳥の歌 (Schwanen Gesang)』に着眼しました。そこでは、ルソーの「自然主義の教育」の影響を射程に入れつつ、人間発達の自然的並びに基礎的な手段を道徳的生活・知的生活並びに産業的生活などの諸側面を捉えました。

今回はこういった考え方を発展させる為にデューイ (John Dewey) に着眼したいと思えます。この一連の連載の第一回目の原稿もDeweyの著書『学校と社会 (The School and Society)』に関して言及していますが、これを更に深化させます。この著書においてDeweyは、子どもの多様な困難・ニーズにもかかわらず公立学校で行われてきた一斉授業・画一授業に対し、「さまざまな可能性 (capacities) や要求 (demands) に応じる機会が殆どない」(p.33) と批判し、そのアンチテーゼとしてシカゴ大学に実験学校 (1896-1903) を設立したことは有名です。そしてこの「実験」とは、「教育課程の構成を可能性 (capacity) と経験に於ける子どもの成長の自然な履歴と調和するように形成」すること、及び、諸学科の配列や選択を「成長期の主要なニーズや諸力に最も適切に応える」(p.97) 形態にするという課題として捉えることができます。

この実験学校で行われた小グループ制に基づく学習は、子どもがその活動に於いて相互に助け合う「協同 (cooperation) と連携の最も自然な形態」(p.16) であり、心身の全体的発達により調和的で全面的なものとなり得ると考えら

れました。

知識の量や蓄積に於いて如何に成功したかを診る為に「試験や復誦の結果が比較される」(p.15) ことに対しDeweyはその批判の眼差しを向けました。試験の結果を用いた他者との比較や学習過程に於ける子ども同士の「競争」は、相互に協力的に助け合うことを妨げ、「協同 (cooperation) と連携」に欠けるとその批判 (p.15) を具体化しています。

学校を競争の場から「社会的、協同的 (cooperative)」な場へ (p.17) と転換することの必要性を強調しているといえます。

Deweyのこういった考え方は、学校教育の文脈で語られることが多いですが、この著書の翻訳者である宮原誠一は、社会教育学者であることから窺えるのですが、(第一回目の連載でも紹介したように) 社会的要因を内包した学習活動の場としての学校教育を念頭に置いた場合に、現実の社会生活や経験から切り取られた知識を伝達する場としての学校という空間を措定していないという特徴があります。そしてそういった学校での学習活動の拠点として図書館があるわけですが、この拠点での最も大切な活動理念が「競争」ではなく社会的な「協同」だということができます。

このように考えてくると、図書館での学習活動が如何に動的でダイナミックな活動かということが見えてくると思えます。そしてこのダイナミックさを協同的に形成するのは、図書館の支援と利用者の学習活動そのものだけということができます。

今回は、このことを更に深める為に同じくDeweyの『民主主義と教育』に着眼したいと思えます。

えだもと ますひろ(准教授・図書館学・教育学)